

No. 193 民俗 炬燵

炬燵は、熱源の上に木枠の台を置き、その上に布団を被せて、数人が同時に暖まれるようにした暖房器具です。

炬燵は、室町時代に禅寺で発案されたといわれています。それは、火を小さくした囲炉裏の上に、低い脚をつけた簀の子状の台を置き、その上に足をのせて着物を掛けて暖をとるものでした。その台が中国の「榻」という踏み台に似ていたことから「火榻子」と名付けられ、それが変化して「コタツ」となったと考えられています。

江戸時代中期になると、木綿布団を掛けて用いるようになり、台の脚も高くなっていきました。囲炉裏を深く掘り下げて腰掛けて使うものも現れました。また一方で、台に底板を張り、その中に火鉢などを入れて使うものも登場しました(写真1)。これは置炬燵などと呼ばれ、持ち運び可能で便利なことから瞬く間に広まりました。大正時代には、置炬燵の炭を入れる容器を木枠で覆い、更に中で容器が回転して常に水平を保つ構造のものが発明されました(写真2)。これは、蹴っても安全ということから安全炬燵などと呼ばれました。

冬の暖房具の定番となった炬燵ですが、炭が燃えている場所を布団で覆ってしまうことから一酸化炭素中毒の危険が付きものでした。そこで、大正13年(1924)には電気炬燵が発売されました。その後、各メーカーが様々な商品を出しますが、基本は台の中に置く熱源を電気に置き換えたものでした(写真3)。しかし、昭和32年(1957)に、熱源を台の上部に付け、中で足が伸ばせる炬燵が発売され大ヒットします。一方で、いつの頃からか、炬燵の上に板を置いて食卓代わりに使うようになり、一般化していきました。そこで食卓と炬燵が一体となり、一年中食卓として使える家具調炬燵と呼ばれるものが誕生し、これが、現在の炬燵の一般的な形となりました。(迫田久美子)



写真1 置炬燵 (現地名カカエゴツ) 山鹿市志々岐 39×39×33cm



写真2 安全炬燵 八代市鏡町 20×20×19cm



写真3 電気炬燵 熊本市 19×19×18cm



熊本県博物館 ネットワーク センター

ホームページ <http://kumamoto-museum.net/kmnc>

〒869-0524 熊本県宇城市松橋町豊福1695 TEL 0964-34-3301 FAX 0964-34-3302

メールアドレス hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp

編集・発行 熊本県博物館 ネットワークセンター 宇城市松橋町豊福1695 TEL 0964-34-3301 2017年1月15日

熊本の自然と文化

熊本県博物館ネットワークセンターだより



天草地域博物館等共同企画展を開催します

未来につなぐ宝物 天草の自然と文化、そして世界遺産へ 天草地域博物館等共同企画展 平成29年 1月21日(土)~2月19日(日) 会場 天草市民センター 展示ホール 時間 午前9時30分~午後5時30分 (入場は午後5時まで) 関連イベント: 天草ミュージアム・スタンプラリー 12/23日~2/19日, わくわく体験!ワークショップ 1/21日, 2/5日, 「天草の崎津集落」関連ネイルアート体験 1/28日, 2/11日

「天草の崎津集落」を世界遺産へ!

天草の博物館等17施設と県博物館ネットワークセンターが共同で、各施設が所蔵する天草ゆかりの収蔵品を一堂に集めた企画展を開催します。

期間中には、化石の型取り体験等のワークショップ、崎津教会等をモチーフとしたネイルアート体験も実施しますので、ぜひご来場ください。

なお、企画展や関連イベントの詳細については、下記サイトをご覧ください。

熊本県総合博物館ネットワーク・ポータルサイト <http://kumamoto-museum.net>



No. 189 動物 ツヤマグソコガネ *Aphodius (Aphodiellus) inpunctatus* (コガネムシ科)

ツヤマグソコガネ(写真1)は牛フンを好むフン虫の一種ですが、本種の国内の分布は九州のみで、生息地は数えるほどしかありません。「盗食寄生」という特殊な生態により、ダイコクコガネ(写真2)が多産する牧場にしか生息できないのです。

日本最大のフン虫であるダイコクコガネは、晩夏から秋、つがい牛フンの下に深い穴を掘り、その中に運び込んだ牛フンでフン玉を作成して、フン玉に産卵します。ツヤマグソコガネはこのとき、ダイコクコガネの掘った穴に侵入し、運び込まれた牛フンに産卵します。ふ化した幼虫はこの穴の中の牛フンを食べて育ちます。なぜこうした面倒な生活様式をとっているのかは、実はよくわかっていません。ただ、牧場の閉鎖などでダイコクコガネの生息地が減少している中、ツヤマグソコガネの生存はより厳しいものになっていると言えます。

写真1の標本は2008年に阿蘇の牧場で採集されたものです。たった1つの標本ではありますが、阿蘇にはまだ本種やダイコクコガネをはじめとする様々なフン虫たちが生息し、「フン虫の楽園」となっている様子をうかがい知ることができます。

(中園洋行)

5mm



写真1 ツヤマグソコガネ



写真2 ダイコクコガネ

No. 190 歴史 村々小前共江 (高森町瀬井家資料)

本史料は、明治3年(1870)7月、熊本藩の藩政改革の一環として、減税を布告するために藩領内に広く配布されたものです。

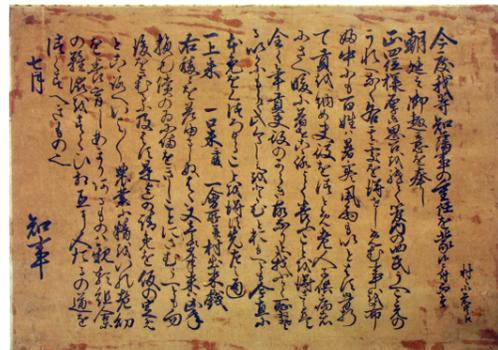
明治3年、熊本藩知事(版籍奉還後の旧藩主の職名)となった細川護久は、大参事(知事に次ぐ役職)に就いた弟の護美とともに藩政改革を行いました。改革にあたったのは、徳富一敬、竹崎津次郎ら改革派の実学党の人々です。その改革の一つが、本史料の「村々小前共江」によって布告された、農民の負担を軽減するための雑税の廃止でした。

内容を見てみると、「知事」(細川護久)から「村々小前共」に宛てて出されており、小前は農民を指します。本文では、年貢負担が大きい農民の苦しい生活について言及し、本来の年貢以外の雑税である、上米、口米、会所并村出米銭、一歩半米を免除することを告げています。本税の3分の1にも達していたこの雑税の廃止は、人々に受け入れられ、細川護久を讃えた「知事塔」といわれる記念碑が、藩領内の阿蘇や久住に建設されるほどでした。

しかしながらこの改革の波は長くは続かず、明治4年(1871)の廃藩置県で、熊本藩は熊本県となり、その後中央政府から地方長官の県令・権令が派遣されて、中央集権化が行われていきます。

江戸時代の幕藩体制から目まぐるしく変わって行く時代の一片を物語る史料です。

(松本晃世)



No. 191 植物 メアゼテンツキ *Fimbristylis velata* (カヤツリグサ科)

テンツキ属植物の一種メアゼテンツキは、田の畦や池の畔などに生育する一年生の湿地生植物です。

高さ10cmから大きくて20cmほどの小さな植物で、花が集まった小穂は長さ7mm程度、その小穂が多数集まった花序ができます。長さ1mmにも満たない小さな果実は倒卵形で、先端にはめしべの花柱が残っています。花柱の基部には長い毛が生えており、これがメアゼテンツキの特徴の1つとなります。

メアゼテンツキが熊本県に分布することがわかったのは1992年で、球磨郡あさぎり町で見つかりました。発見のいきさつやその時採集された標本の調査検討の様子は『BOTANY』(熊本記念植物採集会会誌)50号(2000年)に掲載されています。写真の標本は、この報告の中で述べられている発見時の標本の1つと考えられます。このような、報告等に関連した標本は、調査や研究を裏付ける貴重な資料となります。

(前田哲弥)



果実

No. 192 地学 輝岩中の透輝石

八代市泉町から下益城郡美里町にかけて東西方向に、プレートの沈み込み帯でできた岩体 distributes. その岩体は色々な岩石が混在してできていますが、その中に輝石を主体とした輝岩という岩石があります。この岩石に含まれるのは緑色を帯びた透明～半透明の透輝石という鉱物です。

この地域には、長径約2kmの輝岩の岩体があり、日本で知られている限りでは、最大級の規模です。輝岩中の透輝石は、ほとんどが数mm～1cm程度の結晶(写真1)の集まりですが、場所によっては10cmに及ぶ大きな結晶となります。

写真2は、輝岩中の透輝石の大きな結晶の集まりです。透輝石には特有の割れやすい方向(劈開)がありますが、結晶が大きくなると、劈開とは異なる方向の割れ目(裂開)が発達することがあります。写真1と写真2を見比べてみると、写真2の透輝石は裂開の発達によって葉片状の結晶となっています。この写真2のような透輝石は異剥石と呼ばれています。

写真1と写真2の見た目は異なりますが、化学組成はほとんど変わらないことが明らかになっています。

(廣田志乃)

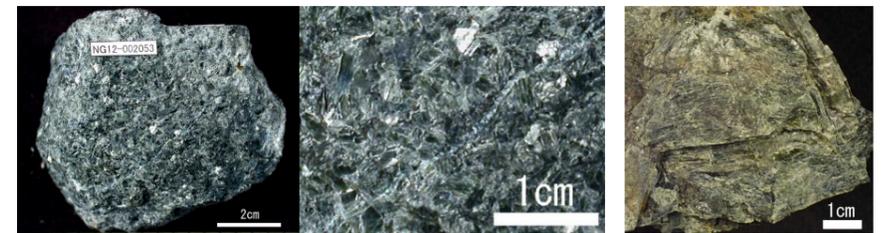


写真1 輝岩(産地:美里町(旧中央町)石場南)

写真2 大きな透輝石の結晶(産地:八代市泉町下岳)

No. 198 地学 フズリナ類 (紡錘虫類)

フズリナ類は、殻を持ったアメーバーのような有孔虫の仲間で、古生代石炭紀前期末～古生代ペルム紀末(約3億2000万～2億5000万年前)に熱帯～亜熱帯の浅い海で大繁栄しました。石炭紀およびペルム紀の時代を決める化石(示準化石)の1つです。

フズリナ類は、図1のようにらせん状に巻いた石灰質の殻を持ち、その内部は隔壁という壁によって多くの部屋に仕切られています。部屋は最初にできた部屋(初房)を包み込むように順に発達しています。殻の外側は単純な形態をしているため、外側の形態だけで種類を区別するのは困難です。しかし、内部は複雑で種類によって異なるので、顕微鏡で内部構造を観察して種類を区別します。

写真1は葦北郡芦北町に分布するフズリナ類を含む石灰岩、写真2はその石灰岩中のフズリナ類の顕微鏡写真です。このフズリナ類はネオシュワゲリナ(Neoschwagerina)というグループの1種です。ネオシュワゲリナの仲間は古生代ペルム紀中期(約2億7000万年前)に生きていたことから、この石灰岩ができた年代は古生代ペルム紀中期だとわかります。

産地一帯の地層は、中生代三畳紀中期～ジュラ紀前期(2億4700万～1億7400万年前)の堆積物が古生代の堆積岩を取り込んでできたものです。フズリナ類を含む石灰岩もそうして取り込まれた岩塊の1つです。(廣田志乃)

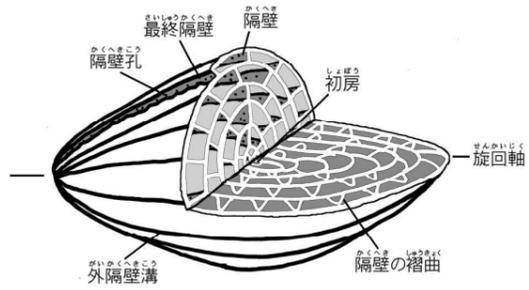


図1 フズリナ類の立体図



写真1 フズリナ類を含む石灰岩(中の粒状のものがフズリナ)



写真2 フズリナ類の断面の様子(写真の横幅 約2mm)



熊本県博物館ネットワークセンター

ホームページ
<http://kumamoto-museum.net/kmnc>

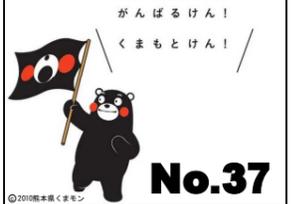
〒869-0524
熊本県宇城市松橋町豊福1695
TEL 0964-34-3301
FAX 0964-34-3302

メールアドレス
hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp

編集・発行
熊本県博物館
ネットワークセンター
宇城市松橋町豊福1695
Tel 0964-34-3301
2017年7月31日

熊本の自然と文化

熊本県博物館ネットワークセンターだより



開催しました!

パレアアジア企画展関連シンポジウム
「大規模災害時における博物館の役割」
2017年7月5日(水)午後1時30分～4時30分



移動体験教室「空飛ぶ種子」
熊本市立大江小学校
2017年6月24日(土)午前10時～11時30分



フィールドミュージアムへ飛びだそう!
「海辺の生き物を観察しよう」上天草市大矢野町
2017年6月10日(土)午後1時30分～3時30分



好評開催中!
企画展「熊本地震と文化財レスキュー」
1 パレアアジア展示
8月27日(日)まで
休館日8月14日(月)
2 熊本県博物館ネットワークセンター展示
9月3日(日)まで 月曜休館
※ネットワークセンターでは日奈久断層のはぎ取り標本(約2m×6m)の展示を行っています。

博物館ネットワークセンターの活動に参加してみませんか

熊本県博物館ネットワークセンターでは、移動体験教室として「ドングリクラフト」「貝がらクラフト」「草木染め」など、体験を通して自然や文化に触れることができるプログラムを準備しています。PTA活動や子ども会活動で利用してみませんか。熊本県博物館ネットワークセンターの職員がお伺いします。

体験に係る費用は材料費と職員の交通費で、謝礼は必要ありません。

この他、講座や自然観察会も開催しております。申し込み方法やプログラム内容は、博物館ネットワークセンターのホームページか、公民館や県内博物館等に配布してあるセンターの年間活動案内をご覧ください。

No. 194 民俗 箱膳

箱膳とは、約30cm四方、高さ約20cmほどの箱型で蓋付きのお膳のことです。引出が付いたものもあります。江戸時代に商家の使用人が使い始めたのが始まりといわれています。それが広まり、昭和初期には全国的に使われていました。

箱膳の中には茶碗や皿、箸などを収納していました。食事の時は蓋を裏返して箱の上に置き、その上に食器を並べて使い、食事が終わると使った食器にお湯を入れて飲み、布巾で拭いてまた箱膳に収納しました。昔は食事のたびに食器を洗う習慣はなく、月に数回洗う程度でした。水道のない時代には、食事の度に食器を洗えるほど水を自由に使うことができなかったこともあります。油を使う料理が少なかったため、毎回食器を洗う必要がなかったことも理由の一つです。

かつては家族一人一人が自分の箱膳と食器を持っていて、食事の時にはそれぞれが自分の膳を取り出して準備し、それぞれが自分の食器を洗って片付けていました。明治になり西洋の食事スタイルが広まると、食事はちゃぶ台やテーブルを家族で囲んでするようになります。また、西洋の食文化が広まり、油で調理したものが増えたため、衛生の面から食器を毎回洗うようになりました。



(迫田久美子)

使用地：八代市 寸法28×28×17cm

No. 195 動物 サシバ *Butastur indicus* (タカ科)

サシバ(写真1)は全長約50cm、翼開長約110cmのタカの仲間で、熊本県では4月頃に夏鳥として飛来します。翼が細長く、喉に2本の白い縦線があり(写真2)、「ピックイー」と聞こえる独特の鳴き声の特徴です。主な餌はヘビやトカゲ、カエルといった爬虫類や両生類のほか、ヤマユの幼虫やカマキリなど大型の昆虫類で、それらが豊富に生息している谷津田の周辺で繁殖します。谷津田とは小さな谷に作られた細長い田んぼの事ですが、近年は減反などでこうした環境がすっかり減ってしまい、それに伴ってサシバの個体数も全国的に減少しているようです。

熊本県では低山部を中心にサシバの繁殖地が散在していますが、あまり多いものではなく、見つけるのは簡単ではありません。しかし、10月頃になると、本州～九州北部で繁殖を済ませたサシバたちが熊本県周辺の上空を通過して南西諸島へと渡るため、県内各地でサシバを見るチャンスがあります。

「ピックイー」という声が聞こえたら、空を見上げてみて下さい。そこには細長い翼のタカが、弧を描きながら舞っているかもしれません。(中藺洋行)



写真1

写真2

No. 196 歴史 綱利公御祝言記録(写) (熊本市辛島家資料)

本資料は、全75頁からなり、寛文3年(1663)6月12日から行われた細川綱利と犬姫が婚礼した時の記録を書き写したものです。

本資料に書かれている細川綱利とは、肥後熊本藩3代目の藩主のことで、犬姫は、水戸藩初代藩主である徳川頼房の9女として生まれ、その後は異母兄である讃岐高松藩主松平頼重の養女となった人物です。

写真を見ると、「寛文三年癸卯六月十二日於江戸上屋鋪(敷)御婚礼御規式之事」とあり、その内容は、「上使として老中阿部豊後守忠秋が来て、綱利の祝言は6月中に出来る様にとの上意を伝えたこと」や「加々爪甲斐守直澄と瀧川長門守利貞が婚礼の取り持ちをする様に老中より言われたこと」などが記されています。

2頁目以降には、「御結納之御祝儀之事」という表題が付けられ、「一 裕 五重」と書かれ、「御息女江」と誰に何を差上げたのかが記されています。

本資料には、表題ごとに多くの品物名や人名が書かれており、細川綱利の婚礼について、または当時の大名婚礼における贈り物についても知ることができる資料です。(堤将太)

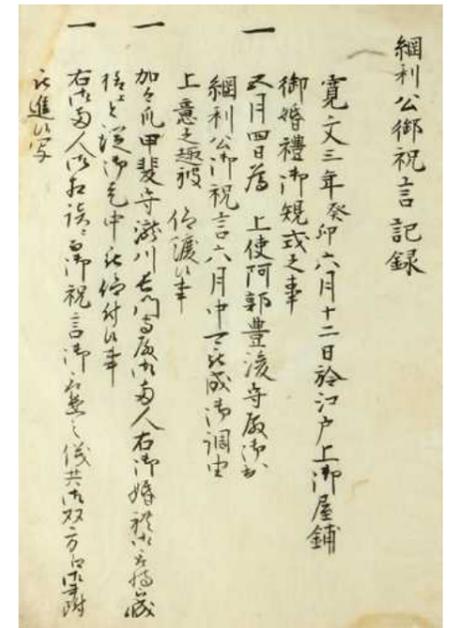


写真 1 頁目表題部分

No. 197 植物 モウセンゴケ *Drosera rotundifolia* L. (モウセンゴケ科)

植物といえば、水があつて太陽が当たっているとすくすくと育つイメージがありますが、自然の中には植物が育ちにくい環境もたくさんあります。そのような環境でも、植物は様々な工夫をして生き抜いています。土中の栄養が少ない環境に生える食虫植物は、足りない栄養を捕らえた昆虫類などで補っています。

モウセンゴケの葉は柄が長く伸びたしゃもじのような形で、表面には細い毛がたくさん生え、その毛の先端には球状になった粘つく液が付いています(写真1-a)。この液が虫を捕らえるためのトラップであり、消化液でもあります。小さな虫が葉に触れて、液に粘つかれて動けなくなると、葉がだんだんと虫を巻き込み、虫を溶かして栄養を取り出します(写真1-b)。

モウセンゴケは日本でもっともよく見られる食虫植物のひとつです。日当たりの良い湿地でよく見られ、6月頃には白い花を咲かせます(写真1-c)。写真2の標本は阿蘇で採られたものです。阿蘇の草原のくぼ地では水がしみ出して湿地や小川になっているところがあり、モウセンゴケをはじめとする様々な湿性植物の大切な生育環境となっています。(前田哲弥)



写真1



写真2

編集・発行 熊本県博物館 ネットワークセンター 宇城市松橋町豊福 1695 TEL 0964-34-3301 2017年 11月 30日	<h1>熊本の自然と文化</h1> <p>熊本県博物館ネットワークセンターだより</p>	 <p>がんばるけん! くまもとけん! No.38</p>
---	--	--

イベント情報 (平成 29 年 12 月～平成 30 年 3 月)

1 博物館ネットワークセンター 第5回企画展「阿蘇の植物」

阿蘇の草原や山地に自生する植物をさく葉標本と生態写真で紹介。阿蘇の自然の豊かさとその価値について興味、関心を持っていただける展示となっております。

○開催期間
平成 29 年 12 月 5 日 (火)
～平成 30 年 2 月 25 日 (日)
※月曜 (祝日の場合は翌日)、12 月 29 日～1 月 3 日は休館

○会場
熊本県博物館ネットワークセンター



ヒメユリ

2 移動展示「荒玉地域 昭和の祭り」と芸能」

民俗写真家の故 白石巖氏が撮影した写真の中から、的ばかい、腹赤の楽、野原神社の祭礼など、荒玉地域の祭りや芸能に関する写真を展示し、地域の民俗文化の特色を紹介。紹介。

○開催期間
平成 29 年 12 月 1 日 (金)
～12 月 26 日 (火)

○会場
長洲町金魚の館



的ばかい

3 フィールドミュージアムへ飛びだそう！「水辺の冬鳥を観察しよう」

大野川にやってくる冬鳥を観察します。今年度最後のフィールドミュージアムとなりますので、興味のある方は、参加してみたい方が多いのでは。 (定員：20名)

○開催日時 平成 30 年 2 月 3 日 (土) 13:30～15:30

○会場 宇城市大野川河口周辺

○受付期間 平成 30 年 1 月 10 日 (水)～1 月 24 日 (水)



活動報告 (平成 29 年 7 月～平成 29 年 11 月)

1 キッズミュージアム

平成 29 年 7 月 22 日 (土)、23 日 (日) の 2 日間、熊本県博物館ネットワークセンターを会場にして毎年恒例のキッズミュージアムが開催されました。ミュージアムパートナーズクラブとの共催で開催されたこのイベントには、児童・生徒を始め 230 名の方々が参加し、化石レプリカや柿渋染め等を体験しました。

こうした活動を通して自然や伝統文化について学ぶ機会を増やしていきたいと思っております。



親子で体験 (化石レプリカ)

2 博物館学芸員等スキルアップ研修会 (平成 29 年度第 2 回)

平成 29 年 9 月 2 日 (土)、20 日 (水) の 2 日間、熊本県博物館ネットワークセンターを会場にして博物館学芸員等スキルアップ研修会が開催されました。博物館、資料館等の職員、市町村文化財担当職員等の技能向上を目的として県内市町村を中心に 20 名が参加しました。

今回は、襖の下張り剥がしについて、兵庫県三木市文化財保護審議会委員で文化財保存修復家の尾立和則氏を講師に迎え、実際に作業をしながら専門的な知識や技能について学ぶことができました。

今後も、こうした研修会等を通して「熊本県総合博物館ネットワーク」の充実を図っていきます。



熱心に受講する参加者

3 その他

(1) 博物館ネットワークセンター企画展
熊本地震と文化財レスキュー (7/11～9/3)
(パレオアジア展示：7/3～8/27)
ちょっと昔の暮らし探検Ⅷ (9/12～11/26)

(2) フィールドミュージアムへ飛びだそう！
土星と夏の星座を観察しよう (8/26)
阿蘇の昆虫を観察しよう (9/9)
月を観察し写真を撮ろう (11/2)
落ち葉図鑑を作ろう (11/26)

(3) 移動体験教室及び講師派遣
化石レプリカ、葉脈標本、貝がらクラフト、草木染め等のプログラムを計 16 の学校や社会教育施設等からの依頼を受けて実施しました。(10 月末時点)



移動体験教室 (貝がらクラフト)

No. 199 地学 高遊原台地をつくる溶岩

熊本空港がある高遊原台地は、火山の噴火で噴き出した溶岩流でできています。写真 1 のように、大峯の山頂付近から西方に熊本空港を望むと、起伏の無い平坦な土地と急な崖でできた台地の様子がわかります。溶岩流でできたこのような台地を溶岩台地といいます。



写真 1 大峯から熊本空港を望む (2015 年 2 月)

この溶岩台地は安山岩という岩石でできており、全体的に灰色で、角閃石という黒っぽい細長い鉱物を含んでいます (写真 2)。台地斜面では、この岩石の露出した崖が所々で見られます。また、溶岩流は東西約 9 km、南北約 4 km、厚さ約 100m で分布しています。このように大規模な溶岩流を噴き出した火山とはどのようなものなのでしょう？

西原村にある大峯 (標高 407.8m) は軽石やスコリアなどの火山砕屑物でできた火砕丘 (火山の噴火で噴出した火山砕屑物が降り積もってできた円錐形の小型の火山) で、高遊原台地を形成する溶岩を噴き出しました。この火山活動は、阿蘇火山で 4 回発生した巨大噴火の 3 回目と 4 回目の噴火の間に起きたものであり、約 9 万年前に噴火したことがわかっています。また、大峯は阿蘇カルデラの西側にありますが、阿蘇火山の側火山 (大型火山の中腹や裾野にある小型火山) とされています。(廣田志乃)



写真 2 高遊原台地をつくる岩石 (安山岩)

No. 200 民俗 藁すぐりと藁打槌



藁すぐり
益城町田原 92 × 52 × 9cm

藁すぐりと藁打槌は、どちらも、藁を加工して道具を作る際の下準備に使う道具です。

藁すぐりは、藁を細工しやすくするために余分な葉を落とす道具です。この作業は手の指を楯状に曲げてでも出来るのですが、より効率よく行えるよう、楯状の道具を手作りして使うようになりました。熊本県では、竹を組んで作った大型のものも広く使われていたようです。

藁打槌は、藁打ちという作業で用いる木槌です。藁はそのままでは切れやすいのですが、平らな石や木の台の上で、藁打槌で満遍なく叩くことで、柔らかく丈夫になり、細工しやすくなります。藁打槌は樫や椿などの堅い木を使い、使う人の手に合わせて手作りされていました。



藁打槌
宇城市三角町 10.5 × 10.5 × 30.3cm

かつて藁は、縄や履物、敷物、祭りの供え物など、様々な道具の材料として利用されていました。農家では、冬場の農作業のないときには、縄ないなどの藁仕事を主に行っており、夜遅くまで藁を叩く音が響いていたそうです。(迫田久美子)

No. 201 動物 オオコノハズク *Otus lempiji* (フクロウ科)

オオコノハズク(写真1, 2)は全長約25cmのフクロウの仲間、熊本県ではほぼ全域に留鳥として生息していると考えられていますが、確認記録が数年に1羽程度という珍しい鳥で、全国的にみても記録は多くありません。本種の確認を難しくしている理由として、個体数が少ないこと以外に、夜行性であること、森林にすむこと、小型種であること、鳴き声ははっきりしないことなどが考えられます。



写真1 オオコノハズク剥製

全身灰褐色の地色に黒や灰色の細かい模様が入り、頭の上には「羽角」と呼ばれるウサギの耳に似た突起があります。これは冠羽の一種で、実際の耳は側頭部にあり、羽毛の中に隠れて見えません。同属のコノハズクとは体が一回りほど大きく、目が鮮やかなオレンジ色をしていることなどで区別されます。



写真2 生態写真(2017年9月 八代市)

熊本県では低山地から山地で、菊池溪谷や九州山地など自然度が高い森林での確認が多いものの、熊本市内や天草でも確認されています。意外と私たちの身近なところでも、夜の森を注意深く観察すると、暗闇の中に2つ、オレンジ色の目が並んでいるかもしれません。(中藺洋行)

No. 202 歴史 肥後孝子伝 後編(写) (高森町安藤家資料)

『肥後孝子伝』は、江戸時代、熊本藩の中村忠亭(正尊)によって編纂されたもので、前編三巻・後編三巻から成り、前編は天明2年(1782)に、後編は天明6年(1786)に成立しています。本書が成立した背景には、江戸時代中頃から、忠孝を尽くすことや、農業などの勤労に励むことなど、庶民の模範となるような善行を行った「孝子」の表彰が盛んに行われていたことがあります。熊本藩でも、特に藩主細川重賢の宝暦の改革以後、多くの孝子に藩から褒賞が与えられました。こうした中で、肥後国内の孝子の事跡をまとめて編纂・刊行されたのが本書です。



写真1 上巻 表紙

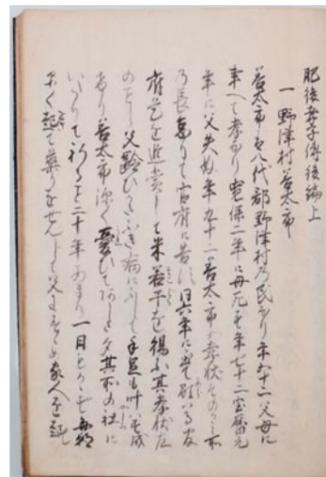


写真2 上巻 本文(拡大)

当センターで収蔵しているのは、後編三巻(上・中・下)の写本で、高森町野尻の川上神社の神官であった安藤幸足が安政2年(1855)に書写したものです。内容を見てみると、後編上巻の一人目に挙げられている野津村善太郎について、八代郡野津郷(現・氷川町)の住民で、父母に孝行し、病気の父の世話を献身的に行い、兄にも同様に尽くして農業に励んだことが記されます。

本書にはこのような親孝行の話など、人物ごとの善行の内容が記述されており、江戸時代の庶民の理想とされていた姿を知ることができます。(松本晃世)

No. 203 植物 ミミカキグサ *Utricularia bifida* (タヌキモ科)

ミミカキグサは、湿地に生育するタヌキモ科タヌキモ属の食虫植物です(写真1, 2)。食虫植物が獲物となる昆虫などの小動物を捕まえる方法は、大別して(1)ねばねばした粘液でからめとる、(2)葉をとじて挟みこむ、(3)袋状になった葉に落とし込む、(4)水中の小さい袋に吸い込む、(5)迷路に誘いこむ、の5つがあります。



写真1 ミミカキグサの標本

タヌキモ科は食虫植物からなるグループで、日本では(1)粘り着く方式をするムシトリスミレ属と(4)吸い込む方式のタヌキモ属が見られます。タヌキモ属の植物は変わった体のつくりをしています。根はなく、茎は葉との区別がわかりにくい「軸」と呼ばれます。そして葉は、種によって多様に変化しています。



写真2 ミミカキグサの花

ミミカキグサの場合、軸が横にはい、そのところどころに細い米粒のような形の小さな葉(写真3)と獲物を捕るためのごく小さな袋(捕虫のう)(写真4)が付きます。捕虫のうは普段はふたが閉まっていてへこんでいますが、獲物が近づくとふたが開き、捕虫のうが膨らんで、獲物をまわりの水ごと吸い込んでしまいます。



写真3 ミミカキグサの葉

夏になると、横にはう軸から、花を付けるための花軸が上に伸び出し、その先に黄色い花を数個付けます(写真2)。咲き終わると、花びらは落ちますが、がくは残って大きくなり果実を包み込みます。このがくと花軸の形が「耳かき」に似ているのが、植物の名前の由来です。



写真4 ミミカキグサの捕虫のう(矢頭)

食虫植物の仲間は、競争相手が多くなりがちな生育条件の良い環境を避け、栄養が乏しいなどの生育に不適な環境で、小動物を捕らえて栄養を補いながら生活していると考えられています。このような食虫植物が生育できる特殊な湿地環境は年々減少しており、それともなって食虫植物も減少傾向にあると考えられています。ミミカキグサは「熊本県の保護上重要な野生動植物リストーレッドリスト2014-」では、準絶滅危惧(N T)に選定されています。(前田哲弥)

熊本県博物館ネットワークセンター

〒869-0524 宇城市松橋町豊福1695
TEL 0964-34-3301 FAX 0964-34-3302
Email hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp
HP http://kumamoto-museum.net/kmnc/

[公共交通機関]
九州産交バス 松橋バスターミナルより宮原経由
八代市役所行き「希望の里入口」下車
徒歩3分
J R 松橋駅より約3km



編集・発行
熊本県博物館
ネットワークセンター
宇城市松橋町豊福 1695
Tel. 0964-34-3301
2018年3月15日

熊本の自然と文化

熊本県博物館ネットワークセンターだより



©2010 熊本県くまもん No.39

イベント情報 (平成30年4月～)

1 博物館ネットワークセンター第6回企画展「くまもとの地質」

熊本県内を6つの地域に分け、それぞれの地域で採取した岩石・鉱物・化石を見ながら熊本県の地質を解説し、また、自分たちが暮らす土地の成り立ちや、その成り立ちと生活との関係について紹介します。

- 開催期間
平成30年5月27日(日)まで
※月曜(祝日の場合は翌日)は休館

- 会場
熊本県博物館ネットワークセンター 企画展示室

【関連企画】

- 1 地層の観察会
 - ・開催日時 平成30年4月28日(土) 13:30～16:00
 - ・場所 御輿来海岸および宇土マリーナ周辺
- 2 展示解説会
 - ・開催日時 平成30年3月25日(日)、5月12日(土) 10:30～12:00
 - ・場所 熊本県博物館ネットワークセンター

※詳細については、博物館ネットワークセンターまでお問い合わせ下さい。



不動岩



ふとん岩

活動報告 (平成29年12月～平成30年3月)

- 1 展示
 - (1) 博物館ネットワークセンター第5回企画展 阿蘇の植物 (12/5～2/25)
 - (2) 移動展示 荒玉地域昭和の祭りと芸能 (長洲町金魚の館 12/1～12/26)
- 2 フィールドミュージアムへ飛びだそう!
水辺の冬鳥を観察しよう (宇城市大野川河口周辺 2/3)
- 3 その他
 - (1) 平成29年度第3回博物館学芸員等スキルアップ研修会 (2/2)
 - (2) 平成29年度第2回県内博物館学芸員等の総合プロデューサー育成研修会 (2/20)



企画展関連講座の様子

センターからのおしらせ

ミュージアムパートナーズクラブに参加してみませんか?



さまざまなMPCが日々活動しています (左:阿蘇火山調査会 右:松橋地域史調査クラブ)

熊本県博物館ネットワークセンターでは、「ミュージアムパートナーズクラブ(MPC)」という団体が活動しています。さまざまな博物館活動に主体的に参加することで、熊本の自然や文化について楽しく学んでいけるクラブです。現在、阿蘇山や動植物、地域の歴史や文化に関する9つのクラブが活動しています。

熊本地震を契機に地域の自然や文化に対する関心が高まっています。みなさんも気の合う仲間と一緒に博物館活動に参加してみませんか?

詳しくは、熊本県博物館ネットワークセンターへお問い合わせ下さい。

No. 204 植物 イヌタヌキモ *Utricularia australis* (タヌキモ科)

イヌタヌキモ(写真1)は、池や溝などの水中に生育する食虫植物です。根はなく水底に固着もせず、水中を漂いながら生活する浮遊植物です。花の時期は夏で、水面に花茎を伸ばし黄色い花を咲かせます。



写真1 イヌタヌキモの生育状況



写真2 イヌタヌキモの標本

写真2は、1991年に熊本市内で採集された標本です。このように

幅2mmほどの細い軸が長く伸びた細長い草姿をしています。この標本では長さ30cm程度ですが、より長くなることもあるようです。イヌタヌキモは食虫植物で、こまかく細く分裂した葉に、小さな丸い捕虫囊をたくさんつけています。この捕虫囊は吸い込んで獲物を捕らえるタイプで、捕虫囊の近くにきた水中の小さな動物を吸い込み消化してしまいます。また、葉の根元から軸が伸び、枝分かれした姿になります。これらの軸の先端には、夏の頃から大きく膨らんだ芽の様なものができはじめます(写真2、矢頭)。これは、^{のう}殖芽もしくは越冬芽と呼ばれるものです。冬期に植物体が枯れても、この殖芽で越冬すると考えられています。(前田哲弥)

No. 205 地学 長者だご (火山豆石)



写真1 長者だご

山鹿市菊鹿町黒蛭^{くろむし}周辺では、天然の土団子(写真1)の入った地層(写真2)があります。この土団子は、肥後国誌では^{あまご}萬餘種、菊鹿町史では長者だごと記されており、「黒蛭の米原長者が田植えの時にふるまったおやつの余りの団子を捨てたところ土になった。赤色で割って見ると黒色の餡が出る。俗に団粉土という。」という話が伝わっています。

写真1の土団子はいびつなものもありますが、概ね直径2～3cmの球に近い形をしています。また、左上の土団子の断面を見ると、中心に周辺より濃い色の餡が入っているのが確認できます。では、なぜこのような土団子ができたのでしょうか。

この土団子は火山豆石といい、火山灰が球状に集まったものです。この成因については、火山の噴煙に含まれる水や雨粒などに火山灰が集まって固まったという説や、堆積した火山灰に水滴が落下したり転がったりして火山灰が付着して固まったという説など、いくつか考えられています。この火山豆石は、約12万年前と約9万年前に阿蘇火山から噴出した2つの巨大火砕流の堆積物に挟まれた火山灰層に入っています。(廣田志乃)



写真2 地層の中の丸い物が長者だご

No. 206
民俗

藁の履物 草履・足半・草鞋

草履は日常的に使われていた履物です。県内では竹の皮や七島藁などを利用したものがありましたが、農家で広く使われていたのは稲藁で編んだ草履でした。写真1のように鼻緒に布を使うと、丈夫で切れにくく、見た目も綺麗になり、また自分の草履の目印にもなりました。

足半は長さが足の裏の半分ほどで踵のない草履です。鼻緒の結び目が角のように見えることからツノンボウとも呼ばれていました。爪先に力が入りやすく、すべりにくいので、農作業や雨の日の外出、川漁などで履きました。労働に使用されることから、天気の良い日でも七日、雨天なら三日位しかたないで、農家では早朝や夜半を利用してたくさん作っていました。



写真1 (左から) 草履 20 × 7 × 1cm・足半 15 × 7.3 × 1cm・草鞋 25 × 8 × 3cm
下益城郡美里町小筵



写真2 ゾウリツクリダイ 70 × 12 × 26.5cm
玉名郡和水町瀬川

草鞋は紐を足首に巻き付けて足にぴったりと固定させる履物です。草履よりも疲れにくいので、遠くに出かけるときや山に登る時などに履きました。

藁の履物を作るには、両足を伸ばして座り、足の両親指に芯となる小縄をかけ、よく叩き柔らかくした藁を手前から差し込んで編んでいきます。長時間この姿勢で作業するのは疲れるため、写真2のような自作の編み台も用いられていました。(迫田久美子)

No. 207
動物

オオイタサンショウウオ *Hynobius dunni* (サンショウウオ科)



写真1 オオイタサンショウウオ標本

オオイタサンショウウオ(写真1・2)は、最大で全長17cmほどになる比較的大型の止水性サンショウウオで、大分県のほか、熊本県、宮崎県、高知県の一部に生息しています。熊本県では阿蘇地域東部の大分県との境界付近に生息地が限定されており、熊本県版レッドリストでは絶滅危惧I B類とされています。

写真1の標本は高森町で採集されたものです。県内には止水性サンショウウオとして、他にカスミサンショウウオが生息しますが、オオイタサンショウウオはこれよりも明らかに大型で、カスミサンショウウオでよく見られる尾の黄色いふちどりがありません。

成体は普段、林床の落葉中や石の下で小さな虫などを食べて生活しているため、なかなか見る機会がありませんが、冬になると水田、池、水たまりなどに集まってきて繁殖を行います。卵のうは水中の落枝などに産みつけられ、条件のいい繁殖場所では、落枝に卵のうが鈴なりについていることもあります。

冬の阿蘇地域は厳しい寒さが続き、水辺では水面が厚い氷で覆われる日も少なくありません。しかしその氷の下では、オオイタサンショウウオたちの命のリレーが人知れず行われているのです。(中藪洋行)



写真2 雄の成体と卵のう(高森町)

No. 208
歴史

野砲兵第24連隊関係資料

野砲兵第24連隊(以下第24連隊)は、明治40年(1907)に編成され、その後、第12師団所属となります。もともと第12師団は小倉に駐屯していましたが、大正14年(1925)に久留米に移駐、昭和6年(1931)に熊本県下で開催された陸軍特別大演習では北軍として第12師団及び第24連隊も参加し、熊本に駐屯していた第6師団率いる南軍と演習を行っています。昭和11年(1936)から満州駐紮。昭和15年(1940)になると久留米から満州へと駐屯地が変わり、その頃、満州を守備していた第3軍の指揮下で東寧に移り、第24連隊も同様に満州国内の治安維持活動に従事しました。



写真1 駐滿記念写真帖

戦局の悪化した昭和19年(1944)になると、連合軍の台湾上陸に備えるために、第12師団は台湾に派遣となり、台湾の警備に当たっていましたが、連合軍は、沖縄へ上陸したため、台湾で戦うことなく、終戦を迎えています。同様に、第24連隊も台湾に派遣されましたが、一部の部隊はカロリン群島ヤップ島に派遣され、それぞれの地で終戦を迎えています。

写真1は、第24連隊名で作成された「駐滿記念写真帖」です。この写真帖は、作成された年代は不明ですが、タイトルに「駐

滿記念」とあることから、第12師団の満州駐紮が始まる昭和11年頃か、駐屯地が久留米から満州に変わった昭和15年頃と考えられます。

写真帖には、家族写真の他に兵士の日常生活を写したものや兵士の集合写真があり、また戦地での風景写真なども貼られています。

写真2は、撮影時期は不明ですが、第24連隊で三池炭鉱四山坑(熊本県荒尾市)を見学した際に撮影された集合写真です。この写真には、「野砲二四 四ツ山炭坑見学」や5人の人物名が書かれています。そして、後側にある建造物は、堅坑櫓と呼ばれる石炭や坑員を昇降するためのもので、すでに平成8年(1996)に解体されています。

戦前や戦中に残された古い写真を読み解くことで、現代に生きる私達が知らない当時の様相を知ることができます。もし、古い写真を持っている場合は、是非読み解いてみて下さい。(堤将太)



写真2 野砲兵第24連隊四山炭坑見学

熊本県博物館ネットワークセンター

〒869-0524 宇城市松橋町豊福1695
TEL 0964-34-3301 FAX 0964-34-3302
Email hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp
HP <http://kumamoto-museum.net/kmnc/>

[公共交通機関]
九州産交バス 松橋バスターミナルより宮原経由
八代市役所行き「希望の里入口」下車
徒歩3分
J R 松橋駅より約3km



No. 213
動物

シータテハ *Polygonia c-album* (タテハチョウ科)

シータテハはキタテハにとてもよく似たタテハチョウの一種で、キタテハが平地でも普通に見られるのに対し、シータテハは西日本では冷涼な山地に生息地が限られ、^{れいりょう}個体数も多くありません。キタテハとは翅の赤みがより強く、外縁の凹凸がより大きく、突き出た部分の先端が丸くなることなどで区別されます(写真1)。

和名の「シー」は後翅の裏面中央にあるアルファベットの「C」に似た白い紋(写真2)に由来しており、学名(種小名)の *c-album* も「白いC」を意味します。

幼虫の食草として、国内ではハルニレ、アキニレ、オヒョウ、エノキ、エゾエノキ、ホップ、カラハナソウ、コアカソ、ホソパイラクサなど、多くの植物が記録されていますが、地域ごとに好みがあるらしく、九州ではハルニレとオヒョウ以外は野外において食草にはなっていないようです。

写真1のシータテハの標本は高森町産で、ハルニレから幼虫を採集し、飼育して羽化させたものです。本種の成虫はたださえ九州では見る機会に限られる上、警戒心がとても強く、特に採集が難しいチョウの一つですが、山地のハルニレやオヒョウの葉を見回ると、派手な色彩の幼虫(写真3)が比較的簡単に見つかります。これを大事に育てて羽化させることで、翅の痛んでいない綺麗な成虫が得られるというわけです。ただし、飼育の手間をできるだけ省こうとして大きく育った幼虫を採集してくると、かなりの確率でヤドリバエ類の寄生を受けていて、^{さなぎ}蛹からはチョウの代わりにハエの幼虫が出てくることになります。資料の収集には、色々と苦労が伴うものなのです。(中蘭洋行)



写真1 シータテハ(左)とキタテハ(右)



写真2 シータテハ成虫(高森町)



写真3 シータテハ幼虫(高森町)

熊本県博物館ネットワークセンター

〒869-0524 宇城市松橋町豊福 1695
TEL 0964-34-3301 FAX 0964-34-3302
Email hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp
HP <http://kumamoto-museum.net/kmnc/>

[公共交通機関]
九州産交バス 松橋バスターミナルより宮原経由
八代市役所行き「希望の里入口」下車
徒歩3分

J R 松橋駅より約3km



編集・発行
熊本県博物館
ネットワークセンター
宇城市松橋町豊福 1695
Tel 0964-34-3301
2018年8月10日

熊本の自然と文化

熊本県博物館ネットワークセンターだより



イベント情報 (平成30年8月～11月)

1 博物館ネットワークセンター第3回企画展「知られざる明治の熊本人」

近代国家として歩み始めた明治時代は、国内外の諸問題に直面していく、まさに激動の時代と言えます。そんな時代の荒波を乗り越えようと活躍した熊本ゆかりの人々を紹介していきます。

- 開催期間
平成30年7月24日(火)～9月24日(月)
※月曜(祝日の場合は翌日)は休館
- 会場
熊本県博物館ネットワークセンター 企画展示室

- 【関連企画】
- 1 講演会
 - ・開催日時 平成30年8月5日(日) 13:30～15:00
 - ・場所 熊本県博物館ネットワークセンター 学習ルーム
 - ・講師 今村直樹氏(熊本大学永青文庫研究センター准教授)
 - ・演題 「肥後の維新」をとらえなおす
 - 2 展示解説会(ミュージアムトーク)
 - ・開催日時 平成30年8月26日(日) 10:30～11:30
 - ・場所 熊本県博物館ネットワークセンター
 - ※詳細については、熊本県博物館ネットワークセンターまでお問い合わせ下さい。



2 「フィールドミュージアムへ飛びだそう！」へのお誘い

- 1 半月の観察と撮影「クレーターを写そう」
日時: 9月17日(月) 19:30～21:30 申込期間: 8月20日～8月31日
場所: 県民天文台(熊本市南区城南町)
- 2 地層と化石を観察しよう
日時: 10月8日(月) 13:30～15:30 申込期間: 9月10日～9月21日
場所: 梶島(上天草市龍ヶ岳町)
- 3 落ち葉図鑑を作ろう①
日時: 11月18日(日) 10:00～12:00 申込期間: 10月22日～11月2日
場所: 肥後民家村(玉名郡和水町江田)
- 4 落ち葉図鑑を作ろう②
日時: 11月25日(日) 10:00～12:00 申込期間: 10月29日～11月11日
場所: 大滝自然森林公園(球磨郡五木村乙字上小鶴)



月の観察会(昨年度)



落ち葉図鑑を作ろう(昨年度)

センターからのおしらせ

ミュージアムパートナーズクラブに参加してみませんか？



さまざまなMPCが日々活動しています
(左:貝類調べ隊 右:草木染めの会)

熊本県博物館ネットワークセンターでは、「ミュージアムパートナーズクラブ(MPC)」という団体が活動しています。さまざまな博物館活動に主体的に参加することで、熊本の自然や文化について楽しく学んでいけるクラブです。現在、金峰山や動植物、地域の歴史や文化に関する9つのクラブが活動しています。

熊本地震を契機に地域の自然や文化に対する関心が高まっています。みなさんも気の合う仲間と一緒に博物館活動に参加してみませんか？

詳しくは、熊本県博物館ネットワークセンターへお問い合わせ下さい。

No. 209 興行日記 (美當一調関連資料)

美當一調 (本名・尾藤新也、1847～1928) は明治・大正時代に軍事講談師として活動した人物です。講談は話についで語り聞かせる演芸で、美當は特に日清・日露戦争を題材とした軍談で名を広めました。

美當は、弘化4年(1847)に熊本市京町の観音坂に生まれました。西南戦争後、正式に軍談師として活動を始めます。その後、「日清戦争談」で全国に名が知られ、「北清事変談」「日露戦争談」も大好評となり各地で興行を行いました。美當は時事的な話題を取り入れた軍談で人気を得て、また、軍事教育という面でも評価されました。

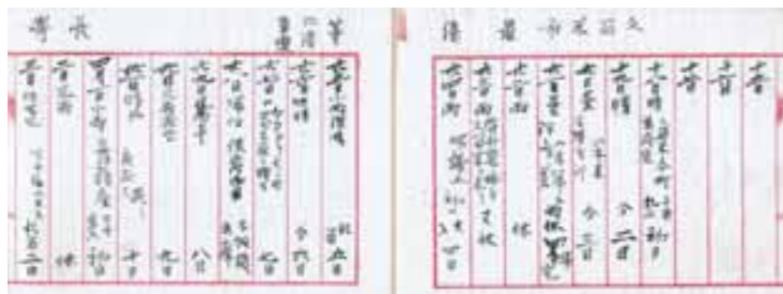


写真 興行日記 本文

本史料は、明治32年(1899)から36年(1903)までの興行を記録したものです。日記には月日・天候・興行場所・日数・客入りなどが記録されています。写真の部分から内容を一部見てみると、明治35年(1902)3月18日から久留米市で興行、客入りは初日「千百札止」とあり満員、演題は「北清事変」で、これは中国で1900年に起きた義和団事件を題材にしたものです。史料には他にも東京や大阪など各地での興行の記録が記され、その盛況な様子がうかがえます。

今回紹介した史料は、企画展「知られざる明治の熊本人」で展示しています。(松本晃世)

No. 210 ジュンサイ *Brasenia schreberi*

ジュンサイは、ため池などに生育する多年生の水草です。地下茎は水底をはい、そこから茎が水中を伸びていき、葉は水面に浮かんでいる浮葉植物です。葉は楕円形で、葉の柄は葉の中央につきます。若い芽や葉の柄は透明な粘質物でおおわれています。スーパーなどで売られている瓶詰めの「蓴菜(じゅんさい)」は、このジュンサイの新芽です。



写真1 ジュンサイの標本



写真2 ジュンサイ標本採集地の現在の様子

店頭で食品として売られることもあるジュンサイですが、野生のものは非常に少なくなっており、「熊本県の保護上重要な野生動植物—レッドリストくまもと2014—」では、近い将来での野生絶滅が危惧される「絶滅危惧 IA 類 (CR)」に選定されています。ジュンサイは、やや貧栄養の水環境を好む植物と考えられており、水質汚濁や富栄養化が原因で減少してしまったと考えられています。

写真1は、現在の熊本市南部にある池で採集されたジュンサイの標本です。①は1961年、②は1967年に採集されたものです。この標本が採集された池は、現在はジュンサイの生育はみられず、ハス、ヒシ、ウキクサの仲間などが多く生育しています(写真2 2018年6月25日撮影)。ヒシの仲間は中～富栄養化した環境を好む植物です。標本から、この池ではジュンサイが好む貧栄養からヒシが好む富栄養へと環境が変化した可能性が見えてきます。(前田哲弥)

No. 211 磨き砂 (阿蘇-4 火砕流堆積物)

金峰山と熊ノ岳(二ノ岳)に挟まれた地域では、かつて、鍋や釜を磨くための砂を採取して販売していました。『河内町史』によると、磨き砂は嶽村(現在の熊本市西区河内町岳)の特産で、熊本の市街地や小方面へ振り売りし、1升3～5銭で販売していたそうです。



写真 磨き砂に利用される火山灰

写真は熊本市西区松尾町平山岩戸で採取した磨き砂で、主に細粒のガラスよりなる火山灰です。この火山灰は、約9万年前に起きた阿蘇火山の4回目の巨大噴火で発生した火砕流(阿蘇-4火砕流)の堆積物で、この地域一帯に点在しています。

火砕流とは高温のガスと粉体が混ざり合った乱流であり、堆積する時に高温であれば、火山ガラス同士が溶けてくっつき合い(溶結)、溶結凝灰岩と呼ばれる岩石になります。一方、低温であれば、溶結せずに(非溶結)、火山灰主体の堆積物となります。阿蘇-4火砕流堆積物では、元の地表面と接する部分に、低温で堆積した非溶結の細粒火山灰層がしばしば見られます。写真の火山灰もそのような地層から採取したものです。

磨き砂は、昭和30年代になって、プロパンガスが普及したことでほとんど利用されなくなったそうです。(廣田志乃)

No. 212 曲げ物の弁当入れ

曲げ物とは、杉や桧、竹などを薄い板材にし、それを円形や楕円形、あるいは方形に曲げて、その合わせ目を桜の皮などで縫い合わせ、それに底板をとりつけた容器です。曲げ物は古代の遺跡からも出土しており、古くから食器や調理器具、様々なものの保存運搬用具として生活全般で使われていました。県内では材料となる杉、桧に恵まれた人吉・球磨地方が曲げ物の産地として知られていましたが、比較的製作が容易なため、県内各地で様々な材料・形状のものが作られていたようです。例えば水上村ではネムノキを、高森町などではハチクを用いていました。



写真 メンツ (阿蘇市波野 20 × 11.5 × 80cm)

今日でもよく見られる曲げ物の一つに弁当入れがあります。県内ではメンパ、メンツウ、ガエなどと呼ばれます。写真の弁当入れはメンツと呼ばれ、明治から大正時代にかけて阿蘇市波野で使われていたものです。側板は竹、底板は杉で作られ、楕円形に曲げた竹の合わせ目を桜の皮で縫い合わせています。曲げ物の弁当入れはご飯がたくさん入るのに軽いことと、木がご飯の粗熱を取り余分な水気を吸収してくれるため、ご飯が冷めて固くなりにくくなるので、焼き畑や草刈り、植林伐採など山仕事をする人たちが主に利用していました。(迫田久美子)